

「土浦御祭礼之図」(土浦市指定文化財)は今から200年前の祇園祭を描いたもので、行列参加者が1700人を越えた祭礼の記録です。絵師は冒頭に「人数之儀は描き尽くし難し」と断りを入れて、この大行列

▼「土浦御祭礼之図」
右に見えるのが道成寺の万度



を描き始めました。それでも絵巻は10頁を超える長さとなり、最終的には625人も的人物を描いた大作に仕上がりました。

土浦の祇園祭は、真鍋台にある天王社(現在の八坂神社)から渡御した神輿が、土浦城内に入ることを見せ場とするものでした。渡御にあたり藩からは神馬などが貸し与えられ、本丸御殿では藩士らも見守るなか神輿に初穂が捧げられました。このときは町名主たちも登城してお神酒を受けています。土浦の祇園祭は武家と町人がともに祝うものでした。

祭りにあわせて町人たちは趣向を凝らした出し物を用意しました。町組ごとに揃いの衣装を着て、行列の先頭には万度とよばれる作り物を出しています。万度とは長く大きな柱の先に町名や花飾り、人形などを取り付けたもので、上部が重いため、バランスをとりながら運びました。

万度のなかには物語の世界を現したのもみられます。中城町の万度には大きな桃と桃太郎の人形が載っています。また、川口町の万度は大きな釣鐘で、般若の面がつけられて

「土浦御祭礼之図」 描かれた城下町の祭礼

います。これは能などで上演された「道成寺」をもとにしたものです。若い修行僧に恋をした娘が、約束を破った僧を追いかけ、恨みから隠れた僧を鐘もろとも焼き殺してしまうという話です。江戸時代に人気であった物語の場面を万度によって表現しています。

大町の万度は、大きな貝の上に竜宮城のような建物がみえる不思議なものです。歴史学者の黒田日出男さんはこれを「蜃気楼」が表現された万度だと指摘しています。むかしの私たちは、蜃気楼は海中に住む大蛤が吐く気で楼閣があらわれる現象だと考えていました。大町がこの万度をつくる数年前に、江戸の深川八幡祭



▲桃太郎の万度(中城町)

▼蜃気楼の万度(大町)

礼で「しんきろう」蛤づくり物の引き物がでているので、これにヒントを得て万度をつくったと推測されています。

土浦の祭礼には江戸の都市祭礼の影響を受けた出し物がみられました。江戸にきた朝鮮通信使の人々の姿をまねた仮装行列もそのひとつです。万度づくりの職人については、江戸から土浦へやってきて制作を行ったことが分かっています(墨僊漫筆之稿)。江戸と土浦は距離的にも近く、霞ヶ浦の水運によりその結びつきが強かったことが、祭礼文化にも影響を及ぼしました。

博物館では12月8日(日)まで、テーマ展「城下町土浦の祭礼―江戸の文化と土浦―」を開催中です。残された祭礼図や日記などをもとに、江戸時代の土浦で行われたお祭りの様子や特色を紹介中です。

岡市立博物館(☎824・2928)

